



つくばね
筑波嶺の峰より落つる男女の川
みな
恋ぞ積りて淵ふちとなりぬる

百人一首十三番 陽成院

十七才で退位された陽成ようせい天皇が院いんとなって後、光孝こうこう天皇の娘である綏子内親王すいしに送られたラブレターである。淵は合流して深くなった場所だから、恋も深くなったという訳である。高層ビルが建つ前までは、関東平野には富士山と筑波山の二つがくっきりと見え、京の都でも知れたる山であった。特に筑波山は男体山と女体山の二つの峰があつて、男女和合の象徴として民衆にも知られていた。それは、常陸風土記にもある様に、筑波の地では春秋の農閑期には歌垣うたがきの祭りが開かれ、そこで若い男女が結婚相手を探し、セックスをするという風習があつたからでもある。陽成院は綏子内親王を后きさきに迎え、八十二才の天寿を全うされている。

令和三年九月十一日

大中臣正比呂 記す